



TITLE:

赤報隊の結成と年貢半減令

AUTHOR(S):

佐々木, 克

CITATION:

佐々木, 克. 赤報隊の結成と年貢半減令. 人文學報 1994, 73: 109-141

ISSUE DATE:

1994-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/48414>

RIGHT:

赤報隊の結成と年貢半減令

佐々木 克

はじめに

- I 京都を脱す
 - II 挙兵の計画
 - III 赤報隊の中山道進軍と高松実村の挙兵
 - IV 「悪い噂」と滋野井隊
 - V 「年貢半減令」をめぐる
 - VI 「偽官軍」への道
- おわりに

は じ め に

この稿では、綾小路俊実と滋野井公寿という、二人の公卿を擁立して挙兵・結成された赤報隊の、主として結成過程とその解隊の経緯に問題をしばって、論じてみようと思う。

周知のように、赤報隊については、高木俊輔氏のいくつかの、かつ詳細な研究がある。たとえば、(A)『維新史の再発掘』(NHK ブックス、1970)。(B)『明治維新草莽運動史』(勁草書房、1974)。(C)『それからの志士』(有斐閣、1985)などがその代表的なものである。こうした高木氏の研究に学びながら、赤報隊結成の地である近江の国＝滋賀県に居住することになったという経緯もあって、少しずつ赤報隊関係の史料を集めてきたのであるが、もとよりその量は微々たるものではあるものの、多少、高木氏の研究につけ加えることのできる事柄も出てきたように思えるので、小論を纏めて見ることにしたものである。

とくに本稿では、高木氏の研究において、比較的手薄であった、赤報隊の結成前後の状況と人間関係、滋野井隊の行動とその意味、年貢半減令と政府・赤報隊との関連などについて論じて見ようと思う。

また、新しく芳賀登氏の『偽官軍と明治維新政権』(教育出版センター、1992)も出された。本書は、高木氏の研究などにたいする批判が述べられているが、その論点に関しては本論のなかで触れて行くことにしたい。ともあれ赤報隊に関する研究がすくないという研究状況のなかで、この小論が少しでも、研究の前進に役立つことになれば幸いである。

I 京都を脱す

慶応4（1868）年1月6日の夜、綾小路俊実と山科元行ほか30人たらずの人数が、山鼻（現京都市左京区修学院山ノ鼻町）の平八という茶店に集まり、そこから比叡山を越え、近江国坂本（現滋賀県大津市坂本。日吉大社のある所）に出た。（なお断らない限り、慶応4年1月中の出来ごとなので、年月は原則として、省略する）。

京都から近江の大津（滋賀県大津市）にいたる道は、東海道の本道である、逢坂越えの他、いくつかのルートがあるが、綾小路等は、京都側から直線的に比叡山を越える、この雲母越と呼ばれる、もっとも険しいルートを、選んだのであった。歩き慣れない綾小路にとっては、難行苦行だったと思われるが、だれかが担いだのかもしれない。一行が坂本に到着したころには、夜が明けていた。

赤報隊に関する唯一の史料集である『赤報記』の7日の記事には「山花村ニテ暫時休足、叡山越坂下へ至ル、御両朝臣へ一同拝謁」¹⁾とある。この場合の一同とは、相楽総三等のグループである。このほか、水口藩グループと元新撰組グループ等が加わって、一行は琵琶湖を船で対岸の守山に渡った。

ところで、この『赤報記』の記述によると、相楽らは綾小路俊実及び滋野井公寿等と坂本で一緒になったように述べられているが、考慮すべき余地がある。それは綾小路の手紙に「（滋野井）公寿朝臣ニモ不図守山ニテ出会」²⁾とあることである。私はこの手紙の文面を信ずべきだと思うのであるが、とすれば、綾小路と滋野井は、守山で初めて一緒になったわけである。つまり、綾小路、滋野井、相楽、水口藩士、元新撰組等々の諸グループは、それぞれ別個に京都を出発して、守山で合流したのであった。そして8日、彼等は松尾山金剛輪寺（現滋賀県神崎郡秦荘町）に到着した。

10日、赤報隊が結成された。1番隊隊長 相楽総三。2番隊隊長 鈴木三樹三郎（元新撰組）。3番隊隊長 油川信近（水口藩士）であった。この前日の9日、綾小路と滋野井の連名で、政府（議定、参與）宛てに、挙兵の届書が送られているが、それによれば「為勤王義勇之士ヲ相募り候処、不期シテ志士蜂ノ如ク起り、雲ノ如ク集り、昨今忽二百人ニ餘り候」³⁾とあって、またたくまに人数がふくれあがったことが知られる。先の綾小路の手紙によれば、最終的には300人程になったとある。赤報隊に参加した者は、脱藩士、農商民、神官、僧侶等々、いわゆる草莽の志士が多かった⁴⁾。この挙兵の届書は、9日に松尾山を発って京都に戻った相楽が、政府に差出したものである。以下に全文を掲げておこう。また、この届書に対して、政府からの回答が出されているが、それも続けて紹介しておこう（なお引用史料の番号は、便宜上佐々木がつけたものである⁵⁾）。

(1)伏惟、京摂之間、朝敵追討之儀、勤王之諸藩日々奏功、実以恐悦奉存候、就テ東方之処、如何被爲在候哉ト心痛仕、於江州愛知郡松尾寺村松尾山金剛輪寺学頭妙寿院、為勤王義勇之士ヲ相募リ候処、不期シテ志士蜂ノ如ク起リ、雲ノ如ク集リ、昨今忽二百人ニ余リ候、是全ク朝威ノ赫々タル所以ト深奉感戴候、此上、追々誠義之徒蟻集可仕候、若王命ニ不随之賊於有之ハ、速ニ退治可仕存候間、此段言上仕候、或即今可追討所モ有之候得ハ、朝命奉戴、如何成強賊ヲモ誅戮可仕候、所集ノ兵士ノ儀ハ、実ニ水火モ不相避者共ニテ、於公寿、俊実モ、固ヨリ決意ノ事ニ有之候得ハ、可然御沙汰奉希度、此段宜御執奏奉願候也

正月九日

俊実

公寿

議定

參與 御中

(2)来翰令披見候、方今中興之機会、不忍座視傍觀之忠志ヨリ被及脱走候條、犯朝憲候儀ハ、甚不容易儀ニ候得共、勤王之為メ不顧身命憤発、被及義挙候段ハ神妙之儀、叡感思召候、然ルニ、頃日、追討ノ諸兵決死奮戦之力ニヨリ、賊徒速ニ敗亡、徳川慶喜遂ニ東奔ニ及ヒ、南方一旦鎮定ニ及候上ハ、其地屯集之義徒等、厚被加鎮撫、弥以淬励、赫々皇軍之威光ヲ被輝候テ、必輕動無之様可被致、猶、征東之官軍不日進発ニ可及候間、東海道鎮撫総督実梁朝臣之手ニ属シ、応援戮力、桑名城ヲ襲撃可有之候、弥以勉励、奉安宸襟候様可有奉公旨、総裁宮御沙汰有之候、仍テ回答如此候也

正月十一日

議定

參與

滋野井侍従殿

綾小路侍従殿

高木(A)によれば、京都に着いた相楽総三は、早速嘆願書と建白書を政府に提出したという。すなわち「最初の嘆願書は現存しないが、たぶん今度の挙兵を正式に許可してほしい、さらに官軍として認めてほしいことを、綾小路・滋野井両卿の名で願い出たものであろう」と推測し、そして11日に、政府から「達し書が下りた」⁶⁾と述べる。この達し書とは、議定・參與から出された(2)の文書である。

しかし高木の推測は再考の余地がある。(2)文書を見ると分かるが、これは「来翰」にたいする「回答」の形式をとっていることが明らかで、(1)の滋野井・綾小路の届書（書簡）に対する議定・參與の返答とみるべきである。はたして高木のいうように、最初の滋野井・綾小路両卿の嘆願書と建白書はほんとうにあったのだろうか。

両卿の届書(1)では、挙兵の状況をのべ、「王命」に従わない「賊」を速やかに「退治」した

いから、「追討」の「朝命」をいただきたく、しかるべき「御沙汰」を希うというものであった。これに対して(2)の政府からの回答は、まず両卿が「朝憲」を犯して脱走したのは、由々しき事ではあるが、勤王のため奮発して「義挙」におよんだのは「神妙」であると、彼等の行動を認める。そのうえで「輕動」なきようにすべきこと、東海道鎮撫総督橋本実梁の「手ニ属」し「応援戮力」すべきであることを、総裁宮（有栖川宮熾仁親王）から「御沙汰」があったということ、回答したものである。

12日、相楽総三は、かの有名な年貢輕減の建白書と嘆願書を政府（議定・參與局）に提出した。たぶん9日夜か10日朝には京都についた相楽が、以前からあたためていた年貢輕減の建白書を、この日になって初めて提出したのは、11日に、政府から両卿の「義挙」を可とする「回答」を得ることができたからであったのではなかろうか。義挙と認められず、あくまでも「朝憲」に触れるということなら、建白書も嘆願書もほとんど無意味なものになるからである。つぎにその建白書と嘆願書⁷⁾を掲げておく。

(3)誠恐誠惶謹言、草莽卑賤之身ヲ以建言仕候ハ、甚恐入次第ニ候得共、此度綾小路、滋野井殿兩卿之御勢ニ加リ、先登仕候ニ付、愚存之義万死ヲ犯シ建白仕候、當時賊勢既ニ浪花ヲ去候趣意ハ、必關東割拠之所存ニテ、唯今之處ニテハ、賊之余燼無之様ニ候得共、關東ハ固ヨリ彼之巢窟ニ候間、弥東下仕候ハ、是則虎ヲ山ニ放チ候患ト奉存候、東海道ハ小田原之城ニ據、兵ヲ函嶺ニ出シ、中仙道ハ高崎ニ據、兵ヲ臼嶺ニ出シ、要地ヲ塞キ防禦被致候テハ、甚蹈破リ難ク、実ニ斧ヲ用ル悔可有之候間、賊ノ不意ニ出、兩葉之内速ニ御征伐被為在度奉存候、加之今點夷之輩、我隙ヲ覬覦致居候義故、此鷸蚌之弊ニ可乗モ難計、是又一大事之義ニテ、兎角急ニ御東征被為在度奉存候、尤右御東征之義ニ付定テ御廟算ハ、数々可有之候得共、當時之處、是迄幕府ニ於テ、關東ハ甚暴斂ヲ極メ、民心皆奸吏之肉ヲ喫ハント存居候義故、幕領之分ハ暫時之間賦稅ヲ輕ク致候ハ、天威之難有二婦嚮シ奉リ、仮令賊ニ金湯之固有之候トモ倒戈之者、賊之蕭牆ニ起リ、必以御東征之御一助ニモ可相成ト奉存候、乍恐右等之条々ハ卑賤之者之建言仕候迄モ無之、定テ廟議モ有之義ト奉存候得共、滋綾兩卿之思召ニライテモ、此義深ク御心痛被遊候義故、不憚申上候以上

この建白書で相楽は、旧幕府領地の年貢を、暫くのあいだ軽くすべきである、と主張しているのであるが、「半減」とは、っていない。もう一通の嘆願書は次のごとくである。

(4)方今御東征之義ニ付、滋野井侍從殿、綾小路前侍從殿、江州松尾山正明寺迄御出張被成候處、御人数追々馳加リ、一方之御助ニモ可相成思召候ヨリ、其段御届申上、官軍之御印且御東征先鋒之義御願ニ相成候處、官軍之義ハ勅許ニ相成候得共、御印且先鋒之義不被命候、

官軍之義ニ候ハ、是非其御印無之候テハ、全軍之居合等ニモ相懸リ、且賊ヲ討伐仕候ニモ、都テノ義ニ付不都合之次第ニ候間、此情実逐一御憐察被下置、嘆願之両様急速勅命ヲ蒙リ度奉存候、願之筋相叶候得ハ、今賊之巢穴ヲ不結内先鋒仕、速ニ寸功ヲ奉奏候、以上

この嘆願書では「官軍之御印且御東征先鋒之義」を願い出たところ、官軍ということに関しては「勅許」になったけれども、官軍であるということの印や、先鋒を命ずるという沙汰がまだないので、とにかく官軍であるという「御印」を、はやくいただきたいと嘆願したものであった。相楽がいう官軍であるとする「勅許」とは、(2)の総裁官の御沙汰と考えるべきであろう。この建白書と嘆願書にたいして、政府から以下のような御沙汰書が出された。（引用は『赤報記』から、なおカッコ内は、『復古記』の記述⁸⁾）。

(5)

滋野井 侍従

綾小路前侍従

其手ニ属シ候草莽士、従前勤王之志願不浅趣、殊ニ関東民情弁知之間モ有之候間、傍以尽力可仕、三道官軍関東打入之節ハ、御印之品朝廷ヨリ可下賜候間、其節ハ速ニ東下、億兆士民王化ニ服候様、嚮導先鋒可仕（可致候）、夫迄之處蓄兵力儲糧食、機会到来ヲ相待、尤過日被仰出候通り、東海道鎮撫使之随指揮候様可申候（可申付）、御沙汰之事（ニ候事）

正月

但今度不図干戈ニ至候義ニ付テハ、万民塗炭之苦モ不少、依之是迄幕領之分、総テ当年租税半減被仰付候、昨年未納之分モ、可爲同様、已年以後之處ハ御取調之上、御沙汰可被爲在候義ニ候間、右之旨分明ニ可申付（聞）事

この史料は、赤報隊のその後を考える上で、決定的ともいえる位置を占めるものである。それだけに、この史料の扱いを巡って、見解の対立もあるのであるが、その点に関しては後でふれることにして、まず私の、当面の解釈を、以下に述べておくことにしたい。

『赤報記』によれば、この文書は「於太政官、坊城大納言殿」より渡された「勅諭書」であるとされている。しかし当時「坊城大納言」なる人物は実在しないし、また「勅諭書」といえるかどうか、ということも考慮すべき余地がある。『赤報記』は、後で編纂したものである、この記述に関しては、思い違いがあると思われるべきであろう。また(2)の文書のように、文書を出した主体が、誰・何処なのか、記載がない。しかしだからといって、この文書そのものを、偽文書と片付けるわけにはいかない（後述）。日付は欠くが、13日か14日に、政府サイドの何処からか出された、御沙汰書と考えておきたい。

さて内容であるが、両卿に属している「関東民情」をよく知っている「草莽士」とあるから、

これは明らかに相楽等のことを指していると考えてよいであろう。そうした草莽に尽力せよと命じているのである。また三道（東海、東山、北陸）官軍が「関東打入」の節は「御印之品」すなわち、相楽嘆願(4)にみられる「官軍之御印」をあたえるから、その節は「嚮導先鋒」となって関東に下る（「東下」）べし、と述べる。注意しておきたいのは、「御印」は今すぐ下賜するのではなく、関東討ち入りの節だということである。しかるにこの時点で政府当局はといえば、関東討ち入りなどということは、何時のことになるのか、ほとんど何の目算もたっていないという状況だったのである。もう一つ重要なことは、(2)の政府の回答と同じように、「東海道鎮撫使」の指揮に従うべしとしていることと、この沙汰が、あくまでも滋野井・綾小路両卿に宛てたものであり、相楽に沙汰したものではなかった事である。

つぎに但書に移ろう。ここでは幕府領の、本年度はもとより、前年度の未納分まで「租税半減」を、はっきりと（「分明ニ」）申付け（あるいは、申し聞かし）ていることである。しかも来年度のことまで、とりようによっては、期待をもたせる言い方になっている。この点など、明らかに相楽の建白書の内容をこえている、とさえいえよう。

相楽総三がこの御沙汰書を、どの程度正確に読み込み、理解したかはさておき、政府が、基本的には、両卿の挙兵と草莽の尽力を認めた事、および政府から年貢半減の「御沙汰」を受け取ったことで、彼はとりあえず満足して、隊に戻ったことであつたと思われる。15日夕方、高宮に宿陣する赤報隊に京都から相楽が戻った。そしてその日、高宮宿の本陣の門前に、年貢半減を告げる高札が掲げられたのであつた。

ここで赤報隊の行動を追う前に、どのような経緯で、挙兵がなされたのか、その計画段階から、人々の動きを探ってみることにしたい。

Ⅱ 挙兵の計画

挙兵の計画は、前年の暮れあたりから具体化されたようであるが、その辺の事情について、油川信近と山科元行が、回想談を残しているので（『史談会速記録』）、まずそれから見てみることにしたい。

(6) [油川信近の談話]

…（鷲尾隆聚卿）が紀州高野山に勤王の義旗を翻かへしました、そこで今の侍医局勤務山科元行は其頃典藥寮医員で能登介といひましたが…綾小路侍従俊実卿を首領に戴いて、東の方江州地方に義兵を挙げて、遙に高野山と相応して京都を護するといふ考へで、窃かに綾小路卿に御話しました所が、綾小路卿は其頃幽閉の御身でありましたが、斯る天下の形勢を座視傍観するに忍ひず、義徒を集めて勤王の師を起さんとの御計画中でありました、

故に意気投合して、乍ち御相談が熟しました、…其頃私も出京して松尾但馬を訪問しましたら、岩倉公が何か御話があるから宮中へ来いといふことでありましたから、宮中に於て岩倉公に拝謁した所が、御親兵御取立のことを御話しがあって御諮問などもありましたが、それから山科を訪問して、綾小路卿の義挙を聞いて大いに勇み立って、先づ藩主の顧問の爲め国元より中村栗翁を呼寄せることを藩主に説きまして、直ちに水口に帰り中村に主命を伝えて、それから窃かに西本祐準、速水湊等へ義挙の話をした…⁹⁾

(7) [山科元行の談話]

…（王政復古クーデター）の際に五條為榮朝臣、鷲尾隆聚朝臣が、勤王の有志輩を率ひて、紀州高野山に義兵を挙げられた頃ゆえ、東方にも備へがなければ帝都の護衛が手薄い、加之今海内擾々として、人民ハ王化の何たるを知らずして、只方向に迷ふて、人心洶々たる形勢ゆへ、これハ志士が傍観座視して居る時でないと思ふて、東の方江州地方へ義兵を挙げて、遥に高野山と相応して、王化の寛大仁慈なることを示して、人心を鎮撫安堵せしむるが宜からうと考へて、綾小路侍従に其意志を談示すると意気投合して、忽ち協議が熟したから、正月六日の晩に叡山を踰へて進行しました、尤も其前に荒木尚一、山本太宰、鈴木三樹三郎、新井俊蔵、篠原泰之進、阿部十郎、西本祐準、速水湊、箕田宇八郎、油川練三郎など…兼て同志であるゆえ、此段斯ういふ都合で勤王の義兵を挙ぐるから、一所に出ぬかといふと、孰れも同意賛成したゆへ、尚外に五六人を説きて、同志を糾合して、其日に進行しました…¹⁰⁾

山科元行の談話から、挙兵の計画は山科が発端で、綾小路を説き、彼の同意を得たこと、そしてその時期は、鷲尾隆聚らの高野山挙兵（慶応3年12月12日）のあとであったことがわかる。また、何時の頃からということは、はっきりしないが、油川信近（練三郎）をはじめ山本太宰、鈴木三樹三郎、阿部十郎等、のちの赤報隊の幹部となる人物と、すでに同志的な結合があった事が知られる。

山科・綾小路の挙兵計画が、高野山挙兵がきっかけとなっていること、そして、山科が挙兵の組織の中心にいたことが、油川信近の談話からも、判明する。ここで興味深いのは、油川の談に見える岩倉具視の存在であり、岩倉と松尾但馬と山科と油川をむすびつけているものである。松尾と山科と油川は、以前からの付き合いがあったようであるが、それは何時頃から、どのようないきさつで始まった交遊であったのか。赤報隊を考察する際、重要な論点となるべき、この問題から、まず考えてみよう。

岩倉具視の「股肱の臣」ともいわれる松尾但馬（相永。非蔵人。松尾社祠官の子）は、山科元行の弟である。松尾と岩倉は文久2年の和宮東下の際知り合い親しくなった。公武合体派の岩倉具視が、奸物視され文久2年（1862）に洛中から追放されてから、両者の接触は一時とき

れたが、幽閉中の岩倉からたよりがあって、慶応1年（1865）春、松尾は藤井九成（処士。明和事件で処刑された藤井右門は曾祖父）をともなって、洛北岩倉村の岩倉具視を訪問した。当時松尾は御所の北、今出川上ル室町頭の柳ノ図子に住んでいて、その隣が藤井の住居で、この二人の間には国事を論じての同志的結合があったのであった¹¹⁾。

慶応1年といえば、41歳の岩倉具視が「叢裡鳴虫」「全国合同策」という有名な国事に関する意見書を書いた年である。8・18政変（1863）から禁門の変（1864）を経て、尊攘派は凋落の傾向を強め、世は岩倉の出番が回って来そうな潮流となっていた。事実朝廷内では、朝彦親王の反対で実現しなかったが、岩倉具視赦免の議が起こっていた。岩倉具視自身ふたび世に出るチャンスを狙っていたのであり、そのためにも、多くの情報と、信頼できる有能な人材を求めていたのである。この様な岩倉具視に、松尾と藤井を通じて志士・有志が紹介されたのであった。

松尾は松尾社がバックにあって生活にも余裕があり、また志士の気概のある人物であったから、松尾の家には、多くの志士・有志が出入りしていた。岩倉具視は、そうした松尾を知っていて、意を通じたということも考えられる。松尾の家に集まるものは、大体の傾向として、尊攘派の系譜につらなる立場の者が多く、したがって幕府の嫌疑を受けているものも少なくなかった。松尾の家は、そのような志士たちの密会所となっていて、彼等は「柳の図子党」とも呼ばれていたのであった¹²⁾。

そうした「柳の図子党」の中に、水戸脱藩士香川敬三（当時は鯉沼伊織。後皇后宮大夫）と近江水口の草莽城多董がいた。そして山科元行もまた柳の図子党の一員であった。城多董は岩倉具視との出会いを以下のように述べている¹³⁾。

十一月中旬積雪ヲ冒シ岐路ヲ経テ潜ニ京師ニ入り、松尾相永ノ家ヲ訪フ、在ラス、会々香川敬三其家ニ在リ互ニ分袂以来ノ事ヲ談シ逐ニ留宿ス、翌日相永帰り来リ、留宿スルコト数日、相永余ニ岩倉前中將公ニ謁センコトヲ勸ム、余其世論ノ許サ、ル人タルヲ以テ相見ルヲ肯セス、相永世論ノ謬妄ヲ弁シ再三勸メテ已マス、十二月^{日ヲ}余岩倉村ノ山莊ニ至リ公ニ謁ス、公已レヲ虚シテ余ニ接シ胸襟ヲ披キ談論ス、器宇識見時流ニ超卓シ、而シテ其忠君憂国ノ至誠言表ニ溢ル、一見シテ其有為ノ大材タルヲ知ル、是ニ於テ推誠心服シ相見ルノ晩キヲ憾トス

城多はそれまで、激派と行動を共にしたことはなかったが、心情的には尊攘派に共感を抱いてきた人物である。その城多が一度の対話で、岩倉に心酔するようになったのである。香川敬三もまた城多と同じような経緯で、岩倉具視の腹心となっていくた。この様なエピソードは、やはり岩倉具視と言う人物の、力量と器の大きさを示すものと、ここでは素直に受け止めておくことにしたい。ともあれこうして「柳の図子党」の多くは、岩倉具視と接触を持っていったが、油川練三郎信近も同志であったと、香川敬三が述べている¹⁴⁾。

この様にみえてくると、挙兵は山科元行が組織行動の中心となっていたが、その背後に松尾但馬がいて、さらにその黒幕として、岩倉具視の存在があった、というように見る事ができそうに思える。しかし事はそれほど単純ではないようにも見える。次に少し長いが、藤井九成の回想筆記を引用してみたい¹⁵⁾。

(8)在京攘夷徒及多少ノ憂国者中□□烏丸卿ノ如キモ岩倉ヲ奸者ト信シ、翌年正月三日伏見鳥羽開戦仁和寺宮出陣迄ニ立至リ、三条以下長州ヨリ帰朝シテ三条、岩倉俱ニ軍事指揮有之、正月七日烏丸卿ハ於禁中ニ岩倉ヲ刺サント計リシ事アリテ同志中沸騰セシ位、又右等之徒輩則チ柳之図子徒モ正月五六日頃ヨリ、岩倉徒ヲウタカヒ別ニ滋野井侍従、高松大夫の兩朝臣ヲ隊將トシ、参謀ニ国学者河喜多真彦、安藤石見介、山科能登介、佐々木可竹等従事シ、在京の水口藩士及諸堂上家来加茂社家ノ士等一百余人、近江水口附近松尾山へ楯籠リ、暴挙ト唱ヘラレ方向ヲ失ス「当時各藩ヨリ注進アリ」

正月二三日官軍監察ヨリ兩卿ヲ刑法掛へ護送シ河喜多、佐々木等軍律死罪、安藤、山科は岩倉党ヨリ他ニ可取調筋有之旨ヲ以テ、兩朝臣ト共ニ引戻シ漸々ニ助命シタリ、故ニ柳之図子ノ挙名モ一時不審ヲ蒙リタリ、京都人数百人随従す、但馬、九成在京ニ付品々論スル也、松尾但馬モ兼テ烏丸卿等会合モアリ、内心岩倉奸オノ卿にて、服従ハ不面白トノ派ニ候ヘトモ、岩倉卿ヨリハ十一月下旬ヨリ屡招キ有之、再三不参ヲ以テス、十二月四日九成ヲ以テ迎ヒ是非面会沙汰ニ付、同姓伯耆兩人ヲ連レ還リ、岩倉卿家来ニ命シテ下足并佩刀ヲ取上、直ニ新政公告ヲ書シメラル御用書記トシ、中川対馬、鴨脚加賀等四人同様4日ヨリ留置、秘密ノ関係ノ間ニテ、松尾山ノ暴挙ニハ逃レタリト、東海道総督使勢州滞陣中ニ右暴挙徒百余人の所刑相成候事、於勢州桑名城下

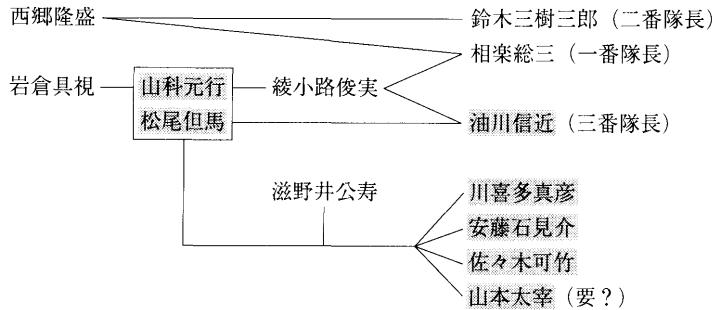
右大珍事現今宮内省ニテ一時評判有之候事、柳之図子党ノ称名高キカ故ナリ

この回想記は明治20年代に書いたものなので、混乱や思い違いが多少ある。しかしこれまで、ほとんど史料的に確かめられなかった、滋野井とその周辺の挙兵に至る事情が、これによってやや明らかになったといえよう。この史料で注目されるのは、(1)烏丸光徳（参与、征討大將軍参謀）と岩倉具視の対立・反目があり（この点は、おそらく攘夷に依然として執着を持つ烏丸と、開明派廷臣として列強への接触をも辞さない岩倉との、立場の違いによるものであろう）、(2)岩倉具視と松尾但馬の間に亀裂が生じており、松尾は烏丸と接触をもっているということ、そして、(3)「柳之図子党」にも立場の違いがあり、(4)この「柳の図子党」の一部（河喜多＝川北又は川喜多真彦、安藤石見介、佐々木可竹、山科能登介＝元行）が滋野井に従って行ったという、以上のようなことがわかることである。

もっとも山科元行（能登介）は赤報隊が結成された後は、滋野井から離れるし、松尾と岩倉

との間の亀裂も、決定的なと言うほどのものではなかったであろう事は、挙兵の段階で、油川と岩倉具視のあいだをとりついだのが、松尾であったということからも推測され、したがって藤井の回想記はやや誇張がありそうであることを認識しておかなければならない。ただし、後で述べるように、川喜多、安藤、佐々木は最後まで滋野井と行動を共にする。

ここで挙兵に関係した主な人物の関係を、図式化しておこう。



くり返しになるが、挙兵にいたる経緯を、グループごとにまとめて述べておくことにしよう。

(1)相楽総三グループ。江戸擾乱の報復として、庄内藩に江戸薩摩藩邸を焼討ちされた後、相楽総三らは江戸を脱出、慶応4年正月5日、京都の薩摩藩邸に入った。そこで綾小路の挙兵を聞かされ、西郷隆盛に新たな任務、すなわち官軍の先鋒隊となることを命じられた。相楽総三は以前から綾小路家に出入りして、国事を論じていたあいだがらであった。

(2)鈴木三樹三郎グループ。新撰組の分派(高台寺党)で、リーダーの伊東甲子太郎が新撰組の手によって暗殺された後、薩摩藩邸に身を寄せた。彼等はすでに油川信近らと挙兵について相談しており、薩藩兵に加わって鳥羽・伏見で戦った後、挙兵について大久保利通と西郷隆盛に相談したところ、おおいに賛成ということで、武器、弾薬、金百両の提供を受け、京都を出発した。

(3)油川信近グループ。油川は慶応1年には「柳の図子党」のメンバーである。宮中で岩倉具視に会い御親兵についての話しがあったというから、これは王政復古後の話しであるが、岩倉とはこれ以前にすでに接触があったことが想像される。この後、綾小路の挙兵を知り、水口に帰り同志を集め、藩主の許可を得た上で、挙兵に参加した。なお油川信近は薩摩藩有志とも接触がある。

(4)滋野井公寿グループ。このグループに関しては、確かな史料がなく、推測部分が多いが以下のように考えている。川喜多(川北)真彦(国学者)、安藤石見介(小林雲遊斎、典薬寮医師)、佐々木可竹(伏見宮家来)、山本太宰は滋野井の側近グループで、四日市(伊勢)で滋野井隊が解散となるまで一緒に行動する。藤井九成の記録によれば、川喜多は同志と記すが、安藤、佐々木については、松尾但馬に出入りの人と記す。しかしいずれも「柳の図子党」の人々

であることは言うまでもない¹⁶⁾。

なお「柳の図子党」の一人に、山本要（上賀茂人、閑院宮侍）という人物がいる。この人物と、山本太宰（曼珠院の家来）とは同人物ではなかろうか。いずれにしろ、このグループは松尾但馬と同類で、あるいは松尾が挙兵計画の中心にいたと言う事も考えてよいのかもしれない。

以上のように見てくると、この挙兵には、「柳の図子党」が深く関わっていることがはっきりする。そして「柳の図子党」と岩倉具視との関係からみて、岩倉も挙兵に無関係ではあり得なかったと言えよう。というより、密接に関わっていた、といってよいのではなかろうか。また高野山に挙兵した鷲尾隆聚が、12月14日付で岩倉具視に「過日は種々御配慮を給り千万深々畏入存候、御蔭ニ而無滞高野山へ着仕候」と礼状を差し出しているのを見ると、鷲尾の高野山挙兵にも、岩倉が関わっていたことがわかる。後でも述べるように、綾小路俊実と岩倉は親しい間柄であった。高野山挙兵と赤報隊挙兵の核となった二人の公卿は、岩倉を介して通じあっていたのではなかったであろうか¹⁷⁾。

従来赤報隊の結成に関しては、相楽総三と西郷隆盛および薩摩藩との関係が強調されてきているのであるが、この点にかんしては見直す必要がある。

Ⅲ 赤報隊の中山道進軍と高松実村の挙兵

1月10日。赤報隊が結成された。挙兵の場所を金剛輪寺としたのは山本太宰の手配による。山本は当時京都の門跡寺院曼珠院の家人で、金剛輪寺は曼珠院の末寺という関係であったから、山本が照会して、決起の場所を選んだものであった¹⁸⁾。

松尾山金剛輪寺は聖武天皇勅願の寺で、天平9年行基が創建した寺であると言われており、本堂は国宝、そして重要文化財に指定されている数体の仏像がある。また境内に立つと、湖東の平野部から琵琶湖をへだてて比叡山を望める景勝の地でもあるように、この寺は、歴史的にも朝廷とのつながりの深い、由緒ある寺であるとともに、戦略的に見ても、きわめて重要な位置に立地しているのである。つまり金剛輪寺は、公卿を擁した挙兵の場選ばれるのにふさわしい、シンボリックな存在なのであった。また排仏毀釈前の当時は、多くの僧堂が有り、厳寒の季節に集まってきた多数の志士を収容可能とする施設もあって、挙兵には最適ともいえる場所なのであった。

11日、彦根藩が大砲3門、ミニヘル銃50挺を献上した。この交渉にあたったのは山科元行である。13日、綾小路俊実が誓紙を読み、隊員が署名、花押をした。14日、赤報隊軍令状を布告し、出発を決めた。15日、出発。ただし滋野井公寿とそのグループは残ることになった。その理由を山科がつぎのように述べている¹⁹⁾。

滋野井侍従と綾小路侍従の間が兎角に折り合わぬ所が有て困った…自然交誼が浅いと見え

て、一所に寄ると議論が合わない、又滋野井侍従は夜分などは神経病を起して寝ぬ夜があった、綾小路侍従の言はるゝには昨夜も夜通し泣いて居った、どうか諭して呉れといはるゝ…滋野井侍従は兎角に心気鬱憂して勇進の気概乏しきゆへ、爰に分離して綾小路侍従と拙者とは兵士を率ひて先進致しました

滋野井はおそらく自分の強い意志で挙兵に参加したものではなかったのだろう。綾小路とも意見が合わず、近江の山の中の雪も降る寒い寺で心細くなってしまったのだろう。こうして滋野井グループは後に残ることになったが、強い意志を持たない、統率力のない滋野井に率いられたこのグループは、後で述べるように問題を起こしてゆく。

ここで一つ断って置く事がある。記述の都合上、これからは綾小路俊実の率いる本隊のみを赤報隊と呼び、滋野井公寿らのグループを滋野井隊と呼ぶことにしたい。また赤報隊が解散したあと相楽総三に率いられて、信州に進軍して行ったグループを嚮導隊と呼ぶことにする。

15日、高宮宿。赤報隊が宿陣とする本陣門前に年貢半減の高札を掲げた。この日綾小路俊実は父綾小路有良に、以下に紹介するような手紙を書いた²⁰⁾。

(9)主上益御機嫌克恐悦奉存候、敝父君弥御機嫌克恐悦奉存候、然は過日脱走後、於江州愛智郡松尾寺村松尾山金剛輪寺、義挙仕候処、不期シテ会候義勇之士、即今三百人ニ及候、是全朝威之輝セラレ候ニヨリ候ト、一同深以感戴仕候、総而最早量り候よりも都合克盛事ニて愉快ニ存候、公寿朝臣ニモ不図守山ニテ出会仕、互ニ志ヲ合セ事ヲ行ヒ、去九日右趣言上候節御内へも模様万端可申上と存候へとも、何分脱走之身分故、朝廷之御時宜如何被為有候やと、痛心仕相控候処、昨夜議定参与より返書着、別紙之通伺候、実ニ有難仰セニテ、一同感涙ヲ流シ候、此上ハ弥以勉励仕、一日モ早ク奉安歎慮□一同存候、就而今日美濃路迄出張仕、其より勢州へ向ヒ、実梁朝臣之手ニ属シ、桑城ニ逗り候心得ニ有之候、万端軍師軍裁参謀ニ依頼仕候故、必御案シ無之様奉願候、併運ハ天ニ有之候故、此段ハ兼而御含奉願候、何分有難御沙汰書ニ而、一同奮発勇氣十倍仕候、尚又後便申上候へとも、今日両役所回答格別有難存候付此段申上候、尚御含置御序ニ宜奉存候、何分春寒強ク当所ハ雪も時々降り候、御地ハ如何や、尚万々御自愛之様伏奉希候、頓首百拝

正月一五日

言上

俊実

この手紙で最も注目すべき所は、綾小路俊実が昨夜(14日)議定・参与からの返書に接し、一同感涙を流し、勇氣十倍となったという状況を述べているところである。この返書というのは政府の議定・参与からの、11日付回答(2)である。その回答は、綾小路俊実らの挙兵を「義挙」と認めるものであった。だからこそ「一同奮発勇氣十倍」となったのである。またこの返

書を綾小路俊実「御沙汰書」と述べている。つまり朝廷＝政府（「両役所」）からの天皇の意志を伝えた公的文書（注8参照）であると理解していることであり、朝廷＝政府が綾小路らの挙兵を「義挙」と公認したから、彼等は「感涙ヲ流」したのであった。さらに綾小路ら赤報隊は、これから美濃路（中仙道）を進むが、その後は伊勢へ向かい、桑名城に行くつもりである、と述べていることである。これは地図を見れば判ることであるが、高宮（現彦根）から桑名へは、再び南下して東海道をゆくか、あるいは間道を進むよりも、中仙道を太田まで出て、それから伊勢路を下る方が、はるかに早くかつ楽な行程なのである。すなわち綾小路俊実は、今は中仙道を進んでいるが、まもなく受け取った「御沙汰書」の指示どおり、東海道鎮撫総督橋本実梁の指揮下に入るつもりであることを、ここで明らかにしていたのであった。この日、相楽総三が京都から帰陣、そして、いずれ官軍の印の品を下賜するという政府の沙汰書(5)を持ち帰った。以後赤報隊は以下のようなコースと日程で、進軍する。

16日、番場宿。…17日、柏原宿。…18日、美濃岩手宿。…20日、美濃赤坂宿。…21日、加納宿。…23日、鵜沼宿。…25日、大久手宿。（…29日、中津川……）。

当初の予定なら、つまり綾小路俊実の手紙(9)の趣旨を守ろうとするなら、赤報隊は21日に美濃赤坂宿（現大垣市）から、加納ではなく、大垣を経て桑名の方向に進路を取らねばならなかったはずである。22日には、東海道鎮撫総督橋本実梁が四日市に着陣し、桑名城接收に備えていた。したがってこの段階で赤報隊は、東海道鎮撫総督の指示に従うべきであるとする政府の指令に、あきらかに背く方向で行動していた、といわざるをえない。ところで彼等の行動を追う前に、もう一つの公家を擁した挙兵について、是非とも触れておかなければならない。

1月18日、公卿高松実村と草莽が挙兵したが、その高松隊挙兵の経緯からまず述べておこう。挙兵の準備は岡谷繁実（館林藩家老格）が中心となって行ったが、その岡谷の回想談によれば以下のような事情であった²¹⁾。

彼等もまた鷲尾隆聚の高野山挙兵に刺激を受け、「東山、東海両道の咽喉の地」である甲府を押さえるために、挙兵することを計画し、高松実村に話したところ同意をえた。鳥羽・伏見戦争後、一日も早く関東へ行こうということになって「大本家」の三条家（三条家の分家が三条西家で、高松家はその分家）に相談する事になり、三条実美（副総裁議定）に話したところ賛成を得、三条からは「朝廷の方は何とか一つ御沙汰に成る様に仕やう」と言われた。ところが16日になって、三条西季知から「有志の者とどういふ工合で関東に出る」ことになったのか「どういふ志か」というようなことが、あらためて問い合わせがあった。そして翌17日に、御所から実村の父高松保実に呼び出しがあって、三条から「俄に御評議が変じて高松へ御沙汰と云ふことに行かぬから、残念ながら思止まる様に」といわれた。しかしどうしても実行に移したい旨を三条に繰り返し伝えたところ、三条実美から、このうえは本人の決心次第だが、御沙汰ということはとても難しい、精々差し止めるように、との伝言があった。こうして三条の制止を

ふりきったかたちで高松隊の挙兵となったのである。かれらは後に「偽勅使」として処分されることになる。

さてここで注目したいのは、三条実美が一時高松らの挙兵を認め、朝廷＝政府の許可（御沙汰）を取り付けてやろうと約束しながら、17日になってから「御評議」すなわち朝廷＝政府の評議が変わったから、正式な許可（御沙汰）は出来ない、と述べていることである。いいかえると政府の方針に、重要な変化があったということである。16日から17日にかけて、なぜ、どのような政府方針の転換がなされたのか。

廟議がなぜ変わったのか、直接説明できる史料はないが、推測の根拠となるべきものがある。嵯峨実愛の日記、16日の条に「滋野井以下、出先下分乱行ノコト」²²⁾とあるのがその一つである。松尾山に残った滋野井グループに、なにか不都合の行為「乱行」があったことが、京都まで届いているのである。真相はよくわからないが、近隣にたいする金品の強要であったのではなかろうか。

上記の出来事を、ふまえてのものがどうか分からぬが、同じ日に「宮、公卿、非蔵人口向諸官人」にたいして、次のような告諭が出されている。「家来、下部等ニ至ル迄、朝廷之御威光ヲ仮り、勤王ヲ口実トシテ世人ヲ欺キ、金穀ヲ貪リ候者モ可有之哉ニ付、急度可申付候」と、宮堂上をはじめとする廷臣の家来、下部（げぶ。召使のこと。下分も同じ）に、勤王を口実として、世人を欺き金品を貪るような者があるが、今後はそうした事のないようにと、告諭したものである²³⁾。

家来だけではなく、わざわざ下部＝召使にまで言及しているところに、注目したい。つまり正規の家来ではなく、食客のような召使のような、そのような者として、多くの草莽が宮、堂上の所に当時出入りしていたのであるが、この告諭はそうした草莽の逸脱した行動を、取り締まる事をも意図していると解釈してよいのではなかろうか。廟議＝政府は、草莽の統制を真剣に考え始めていたのではなかろうか。

以上のような、政府の方針転換は、当然のごとく赤報隊の扱いにも影響を及ぼして行くと考えべきである。11日から14、5日にかけての政府の以前の態度(2X5)とは、違ったものとなっていたのではないかと、私は推測している。

Ⅳ 「悪い噂」と滋野井隊

……綾小路侍従の隊は正月二十二日岩手を発って、垂井の宿に泊り、二十三日は加納に泊り、加納藩永井家に大砲を献じさせた。ここで悪い噂が伝わってきた、それは江州松ノ尾村に滞在中の赤報隊士と称する強盗が、付近数里の間の豪家を襲い、金を強奪したというのである。京都ではその噂を信じているらしい…そういう浮説は、目的があって創られた

らしい……（『相楽総三とその同志』^{24）}）

長谷川伸のこの有名なノンフィクションは、このくだりについては、なにも史料を示していない。また日付と場所も一致しない所がある。しかし「悪い噂」が赤報隊にも届いたのは、やはり23日頃のことではなかったかと、私も同じように考えている。その証明となりそうなのが、相楽総三の動きである。

23日、相楽総三は、朝廷＝政府に再度の建白をするため、京都に向けて使節を加納から派出した。この時の建白書は二通あり、一つは「難有勅諭ヲ蒙り、三道官軍打入之節ハ、先登致候様被命、一日千秋其機会期待居候得共、未タ其御沙汰モ無之」と、先に（13日か14日）政府から出された沙汰書(5)（相楽総三はこれを「勅諭」という）では、官軍が関東へ討ち入る節は、「御印之品」を下賜するから、「嚮導先鋒」となるべしという、有難い沙汰があったが、いまだに正式には何の沙汰もない、どうか敵が備えを充実させる前に、「速ニ御東征之錦幟」＝錦旗を下されたい、というものである。またもう一つの建白書は、東海道は官軍に加勢する藩も多く、兵威も盛大である、しかし「東山道而已何分ニモ兵威モ不張殊ニ奸藩モ多分有之」情勢であるから、赤報隊には東山道進軍を許可してほしいという、以前からの彼の主張をくりかえしたものであった²⁵⁾。

15日に相楽総三が、京都から朝廷＝政府の沙汰書(5)を持ち帰ってから、朝廷政府サイドからは、何の命令や指示もない。ましてや官軍だとする印（錦旗など）も与えられることはなかった。先に述べたように、16,17日、政府の草莽に対する方針の転換があったから、政府サイドは赤報隊に新たな指令を出さなかったのである。そうした状況の変化を知らない相楽総三は、いささかの焦りと不安を感じて、再び建白書の提出を考えたものであったと思われる。また先の「悪い噂」に関して、京都の状況を調べ、場合によっては何かを釈明しようという考えがあったのかもしれない。

ところで、長谷川伸『相楽総三とその同志』によると、「悪い噂」は赤報隊をおとしいれるため、故意に作られ、噂として広められた、と述べられている。しかしこの指摘は正確でない。朝廷＝政府は、滋野井隊も赤報隊の一部であると認識していたから、すでに16日に、滋野井隊の「乱行」の情報を得ていた以上、赤報隊に関する「悪い噂」は、故意に作為されたものでもなく、意識的に流されたものでもなかったのである。

赤報隊（滋野井隊を除く）は、軍律も厳しく統制の行き届いた隊であったようである。赤報隊一番、二番、三番隊の進軍には、民間からの金銭面での苦情等を除けば、特記すべきトラブルがあったというような記録は残されていないように思える。しかし滋野井隊に関しては、だいぶ事情が違う。ここで滋野井隊の行動について述べておくことにしたい。

滋野井隊は赤報隊の本隊に数日遅れて、同じ東山道を進軍していった（一部の本に、滋野井隊

が、松尾山から水口をへ、東海道を亀山、四日市と進んだように書かれているが、それは間違である)²⁶⁾。21日には高宮宿を発ち、この日関カ原を通行しているから、赤報隊本隊から4日程後れている。このあと滋野井隊は、大垣から揖斐川を渡って墨俣へ、そこから南に下り、伊勢長島から桑名表を経て、25日四日市に入ろうとしている。

この間、多分23日か24日に、滋野井隊は伊勢長島藩に「種々難題申懸」、二万両の献金を要求し、三百両を「幕府随従為謝罪献金」という名目で差し出させていた²⁷⁾。これは滋野井隊の軍資金として奪い取ったようなもので、朝廷＝政府に収めるためのものではなかった。すでに勤王誓紙を差出し、朝廷＝政府軍へ帰順していた長島藩は、当然このことを政府軍に訴えた。その結果滋野井隊は官軍の軍律を犯した事になった。また滋野井隊の風体は、衣服や槍・薙刀などをことさらに血に染め、汚れた袴を付けた者が、声高に騒がしくうろついているなど、見苦しいところがあった²⁸⁾。

25日段階で、滋野井隊の人数は170人ほど²⁹⁾、ということであるが、これは途中から参加していった者が加わって数がふくれあがったものであろう。これだけの人員の賄いだけでも、すくなくならぬ金が必要となるだろう。滋野井隊の軍資金押借は、長島藩の例だけではなかったのではないだろうか。松尾山を出発して以来、行く先々で強引な軍資金集めが行われていたのではなかったか。ともあれ滋野井隊は、「官軍」先鋒隊としてはふさわしくない、むしろ厄介な存在となっていたのである。政府からみれば、滋野井隊も赤報隊の一部である。赤報隊の「悪い噂」に関しては、その責任の多くは滋野井隊が負うべきであるように思える³⁰⁾。

26日、滋野井隊の「重臣」数名が、「非道之金銭取立」を理由に、四日市に滞在の東海道鎮撫総督付属の肥後藩兵によって召し捕えられ、そのうち数名が処刑された。『橋本実梁陣中日記』によれば9名(a～i)が逮捕され、このうち5人が処刑されたとある。なお『戦亡殉難志士人名録』によれば8名が処刑されたとあり、a～i以外の人名もあげられている。カッコ内が同書に記された名前であるが同一人物で、j kが『橋本実梁陣中日記』には挙げられていない人名である³¹⁾。

- × * a 山本太宰
- × * b 河北直一郎(川北真一郎) = 川喜多真彦
- * c 小林雲遊斎(安藤石見介)
- d 森城之助
- × * e 玉川熊彦(k 綿引富蔵)
- × f 大野幡之助
- × * g 小笠原大和
- * h 赤城幸太郎(赤木小三郎)
- i 松岡主計

＊j 佐々木可竹

（k 綿引富蔵）

上記のうち a 山本太宰, b 川喜多真彦, c 安藤石見介, j 佐々木可竹（司馬）は、挙兵の計画のところですでに見てきた人名で、川喜多、安藤、佐々木は柳の図子党であったこと、山本もあるいはそうではないか、と推測されること等について述べてきた。また e 玉川は、じつは k 綿引富蔵（水戸藩士）の変名である³²⁾。g 小笠原大和は、現在の私にはまだ素性が分かっていないが、『復古記』には a 山本太宰とともに、滋野井隊の「謀主」であるとする記録がある³³⁾。

ところで柳の図子党の一人で、岩倉具視の腹心である城多董の『昨夢記』によれば、水戸藩士「小室某」が赤報隊に参加して、途中で斬られたと記している。この小室某とは水戸藩士小室左門であることは間違いなく、綿引富蔵と小室左門の墓が、二つ並んで四日市市の泊霊園に建てられている³⁴⁾。また彼等を逮捕した肥後藩の記録『改訂肥後藩国史史料』には、長島藩に難題をふっかけた首謀の者は、a 山本, b 川喜多, e 玉川（k 綿引）, f 大野（小野とする史料もある）, g 小笠原であると記している（×印）³⁵⁾。

『戦亡殉難志士人名録』によれば、a, b, c, e, g, h, j, k の 8 名が処刑されたことになっているが、これは正確ではない。まず e と k は同一人物である。また c の安藤石見介は、柳の図子党の藤井九成の記録では、四日市で処刑されてはおらず、死んだのは後年のこととなっている³⁶⁾。また『復古記』は a, b, c, e (k), g, h, j の 7 名（×印）が処刑された旨を記しているが、これも c 安藤の名前をあげている。安藤は処刑されたのだろうか。藤井の記憶違いなのだろうか。

このとき実際に処刑されたのは誰々だったのか。上記の人名のうち、d 森, i 松岡は、逮捕されただけで処刑者リストから除外してよいだろう。また確実に処刑された者とみてよいのが、a 山本, b 川喜多, ek 綿引, g 小笠原で、c 安藤と f 大野と h 赤城そして j 佐々木も可能性はある。この中で、素性の不明な人物は、f 大野, g 小笠原, h 赤城の三人である。とすれば、ek 綿引と並んで墓が建てられている水戸藩士小室左門は、この三人の中の一人である、と推測してもよいだろう。ただしこれより先には、今のところ、進む材料がない。

「聖諭ノ趣ニ違背シ、総督府ノ命ヲ不待、妄ニ敵地ヘ侵入、剩ヘ増山対馬守領内ニ於テ不法ノ所業有之、彼是人心及動揺、官軍御瑕瑾ヲ醸出シ候段、不可許行跡、依是、遂詰問、伏罪、加誅戮、正軍律候事」というのが、処刑の理由であった。軍律を犯した罪による断罪であるが、有無をいわさぬ、みせしめの意図をこめた死刑であった³⁷⁾。

V 「年貢半減令」をめぐる

17日、赤報隊の一行が柏原宿に滞陣した。赤報隊隊士が百人余り、随従する彦根藩士らが50人余であった。柏原宿では、一行の食料や荷物の継立人馬賃を受けとらなかった。

18日、出発にあたり、赤報隊は滋野井、綾小路両卿の名で、庄屋にたいし年貢半減を申し渡した。内容は、最初の宿の高宮で布告した年貢半減令と、基本的には同じものであるが、以下に参考まで、全文を掲げておくことにしたい³⁸⁾。

(10)

近江国坂田郡何々村

右は此迄徳川慶喜支配之处、此度慶喜朝敵と相成り候に付、支配之地は不残御召上に相成り、以後は天朝の御領と可相心得候、尤も是れ迄於慶喜不仁之处置も有之、百姓共定めて難渋不少義と思召、当年之年貢半減に被成下候間、此旨厚く相心得、天朝の御仁徳に服し奉り、勤王の道相守候様御沙汰之事

滋野井侍従（花押）

慶応四年正月

綾小路前侍従（花押）

何々村庄屋百姓共へ

また参考までに、赤報隊が15日、最初の宿場高宮の本陣門前に掲げた、高札のなかの年貢半減についてふれている箇所も、引用しておくことにする。ちなみに『赤報記』には、「本陣門前」に掲げた高札と、「天朝御領へ相建候高札」の二つが記されている。(10)に引用した年貢半減の沙汰は、「天朝御領へ相建候高札」とほぼ同じものである³⁹⁾。

(11)徳川慶喜義、朝敵タルヲ以官位被召上、且從來御預之土地不残御召上ニ相成、以後ハ天朝御領ト相成候、尤是迄慶喜之不仁ニ依リ、百姓共之難儀モ不少義ト被思召、当年半減之年貢ニ被成下候間、天朝之御仁徳厚相心得可申、且諸藩之領所タリ共、若困窮之村方難渋之者等ハ、申出次第天朝ヨリ御救助可被成下候事

年号月日

官軍赤報隊 執事

みられるように、(10)は幕領の村々に出された年貢半減令であるのにたいし、(11)は幕領は「年貢半減」を、困窮、難渋の「諸藩之領所」は「御救助」するであろう、というものである。15日高宮、16日番場、17日柏原、18日岩手（垂井）、20赤坂、21日加納宿と、行く先々で赤報隊は、年貢半減を布告して、進軍していったのであるが、いずれの宿でも、(10)、(11)の両方の高札

を掲げていたのか否か、はっきりしない。

ところで、年貢半減令に関しては、周知のようにいくつかの問題が指摘されてきている。これからそれらの点について触れてゆくことにするが、まず問題点を整理して置こう。それらは以下に述べる諸点である。

イ、朝廷＝政府は年貢半減を、布告したのか。ロ、布告したとすれば、何時どのような形でものか。ハ、朝廷＝政府は、その年貢半減令を取り消したのか、そうだとすれば、何時の事か。ニ、赤報隊は、朝廷＝政府から、年貢半減布告にかんして指示を得ていたのか、否か。

朝廷＝政府が年貢半減令と、どの様に関わっていたのか（イ、ロ、ハ）という問題から述べて行こう。この点にかんしては、既に先学の研究で、多くの事実関係が明らかにされているので、ここでは、それらを確認したうえで、私の知見を少し加えてみたい

〈イ、ロ〉 備前、長州、芸州の三藩に、正月14日付で政府から、「山陽道取調…作州津山其他諸藩之情実糾問」のうえ書上て報告すべし、とする指令が下されたが、この指令の但し書きに、以下に紹介するような年貢半減をする旨の文言がある⁴⁰⁾。

(12)諸国之中是迄天領と称し、右は徳川氏之采地其他賊徒之所領等、別而入念調可仕、右は従前苛政ニ苦ミ居候義ニ付、当年租税之義は半減被仰付、去年未納之分も可為同様、来巳年已後之処は取調之上御沙汰可被為在義ニ候間、右之旨申諭億兆人民王任（化か、ママ）ニ服候様精々尽力可仕御沙汰之事

これは去年未納の分までふくめて、年貢を半減しようという布告であるが、その対象となるのは、「徳川氏之采地」＝天領と、「賊徒」＝朝敵藩の所領である、と理解すべきである。この年貢半減令は、13日か14日に政府から相楽総三に出された御沙汰書⁽⁵⁾、すなわち「幕領之分、総テ当年租税半減被仰付候、昨年未納之分モ可為同様候、巳年以後之処ハ御取調之上、御沙汰可被為在候」とする年貢半減の指示と、基本的には同じものである。

ところで、この布告が出された前日の13日に、中国四国追討総督に四条隆謨が任命されており、この年貢半減令⁽¹²⁾は、この中国四国追討政策を遂行するため、その支援策としての意味を持つものでもあった、と解すべきであろう。なぜなら、この段階における政府は、まず近畿以西の諸藩を味方に取り込み、この地域の安定を実現する事を、緊急の課題としていたからであり、仁和寺宮嘉彰親王が征討大將軍（兼、議定・軍事総裁）となり、10日に大阪の本願寺別院を本営として、中国四国追討の陣頭指揮に当たっていたからである。備前、長州、芸州三藩あての指令には、「卒忽之義」があった場合は、「將軍宮」＝仁和寺宮征討大將軍の指示に従うよう命じている。

またこの年貢半減令は、勅書あるいは太政官布告というような、発行主体が明確なものではない。しかし政府から出された、正規の布告であることは疑う余地がないであろう。なぜなら中国四国地方の天領や賊徒の所領の、取り調べを行っている三藩を、直接指揮していたのが、軍事の最高責任者である仁和寺宮だったからである。仁和寺宮は議定・軍事総裁・征討大將軍(18日には、さらに海陸軍務総督に任)の任についており、これは総裁の有栖川宮熾仁親王を別格とすれば、当時の政府における、文武両官の最高官であり、まさに権力の中枢に位置していた人物なのであった⁴¹⁾。その人物が関与した「御沙汰」なのである。

(12)の年貢半減令が政府から出された、いわゆる公文書だとするなら、これと基本的に同じ内容の年貢半減令といえる、相楽総三に渡された御沙汰書(5)もまた、ほとんど疑いをいれる余地もなく、政府サイドから出されたものであったと見てよいだろう。このように考えてみると、(12)の年貢半減令は、まず中国・四国地方を対象とした、地域的な限定性をもった布告であった可能性もあるが、相楽総三に渡された(5)の年貢半減の指示は、いうまでもなく近畿以東を対象地域となるものであったから、この両者を合わせると、年貢半減令の対象となるのは、ほぼ全国的広がりをもつと考えてよいだろう。これがこの段階に置ける、朝廷＝政府の意志であり政策であったのである。

〈ハ〉この点については、政府の法令にかんする草稿を集めた「内国事務諸達留」を調査した、宮地正人によって明らかにされた事実がある。そこには、年貢半減の布告文を、朱筆で消した跡が残っている書類があるのであるが、以下にまずそれを引用して、検討を加えておくことから始めたい⁴²⁾。

(13)

將軍宮并所々出張總督江

今般〔御復古〕王政御一新ニ付、是迄天領と称シ来候徳川之采地及賊徒之所領等〔は〕念入取調可致、右は従前苛酷之弊政ニ苦候哉〔ニ付、当年租税之義半減被仰付、去年未納之分も可為同様、来巳年以後之処も取調之上、御沙汰可被為在儀ニ候間、右之旨、別紙之通夫々取締被仰付候間、尚亦申論〕之趣も相聞、患難疾病相救之道も相立兼候ニ付、先無告之貧民天災に罹り、困難之者江は夫々御取糺之上御救助も可有之候間、右之旨申論兆民王化ニ服シ候様精々尽力可仕御沙汰候事

(注〔 〕の部分削除されたもの。アンダーライン部分が加筆したもの)

元の文章は、ほぼ(12)に引用した年貢半減の布告と同じである。また訂正された文章は、「内国事務諸達留」の1月27日の条にあるものであるが、ほぼ同文のものが、『復古記』(第一冊、725 p)の1月27日の条に掲げられている。出典は、「東海道先鋒記」「北陸道先鋒記」とある。このことから、この年貢半減部分を抹消した布告(「年貢半減撤回」布告ではない)は正式に

公布されたものと、みてよいのではないと思われる。

すなわち、政府は1月27日には、明らかに年貢半減を「抹消」する、という行為を行っていたのであった。ただし宮地によれば「年貢半減の撤回は、伺いに答える形でのみ表明され、半減令撤回の布告はまったくなされなかった」ということである。

では1月14日の、年貢半減令の布告から、1月27日の年貢半減令の撤回までのあいだに、政府内には、どのような状況の変化がおこっていたのか、ということが問題となる。以下に、この点について考えてみよう。まず史料を紹介しておこう。

(14)の手紙は、東山道鎮撫総督の岩倉具定に随従して、近江の天津に滞陣していた、岩倉具視の側近の一人である香川敬三が、岩倉具視に宛てた書簡であるが、その同じ書簡に、岩倉具視が返事を書き込んだものである⁴³⁾。「」内が岩倉具視が書き込んだ文)

(14)頓首誠惶再拜言上

「同紙宥免、不相変御用繁一筆ヲ取ルノ間モナシ」

益御機嫌克被為渡、恐悦至極ニ奉存候、而公様ニも御機嫌克被爲入候間、乍恐御安堵被
「忝存候、益無事勤仕放念給候」「忝安心致候、若年ニ而小児同様の者、実によ
ろしくよろしく補翼頼存候、累年北山ニ而教導終ニ相逢事実ニ御互ニ本懐ニ候半
也」

爲遊候様奉懇願候、其外御供奉之者供一統、無異罷在候間、是又御安慮之程奉願上候、

「足下始メー同無事之旨令賀候」

然は昨日も言上仕候、年貢半減等之義奉伺候処、今以御沙汰不被爲在、甚苦心仕居候、

*「此事よほど苦心候得とも、不被行別紙ニ申入候通也、乍去民心を治事口実而已
ニ而ハ決而不可成、其間臨機之處置を以而大ニ民心をとるへし、乍去散財穀之
筋ニ而半減と申事ハ不可之御事ニ候」

若御決議ニも被為成候ハ、急々奉伺度、恐懼之至極ニ候得共、以書中奉願上候、扱又今日
は佐倉静逸下局ニ而御尊諭之趣被仰聞、難有奉拝承候、尚綾小路卿、滋野井卿之御義も深

「静逸供願候得とも、是ハ先当家ニ留め置候心得也、併濃州勝手も承知之人故差
出し候ハハよろしく□□可申候」

「此兩卿事ハ種々異論追々注進如何にも不都合ニ付別紙申入候通り也」

御痛心被為在候由、奉恐察候、是は愚考スルニ、アナカチ農商之申通りニも有之間敷、夫
ニは不得止情実も可有之御事と遠察仕候、此義は私共等より、彼の御陣へ参上仕、朝廷之
御痛配之趣キ等申上候ハ、速に東海道迄御出馬之運ヒニ可立至ト奉存候間、何卒右御陣
迄、北島、敬三兩人程参上之義、御許容被為在候ハハ無此上も難有仕合ニ奉存候。

「兩人行向之事ハ至極之事ト存候、弟ニも同列殊ニ綾小路ニハ間柄

傍深情ヲ尽くし風聞之儘可申入頼候、実ニ残心之事也」

尤以朋友之情も有之候（朋友之情トハ、山科能登之介、油川藤三郎等ナリ）間、傍御

「此兩人ニも助才ナカルヘキノ所如何致し候事ヤ、扨々残心之事ニ候」

免之程偏ニ奉歎願候

一 大津代官石原清一郎申候ニは、過日謝罪之事、朝廷ヘ奉歎願候処、御許容ニ相成、

「此通り也」

如元代官職被仰付候旨云々申居候、又信楽代官之義相尋候処、是も同しく、天朝之御

「此通り也」

代官と相成候旨石原清一郎申居候、此義は京師ニ於而奉伺候事も無之義故、為念言上

「申落候、不都合々々御断申入候」

仕候、左候ハ、右兩所之義ハ、諸帳面持参ニ而、朝廷迄可参旨申渡候義ハ相止メ候而

「此通りニ頼候」

も宜敷御事ニ候や奉伺候、其他申上度事ハ山々御座候得共、後便ニ可奉申上候、誠恐誠惶
頓首謹言

正月二三日

香川敬三 拝上

言上

「同紙荒々及返答候、可申入事弟ニも山々候得とも、不任心底、別紙代筆申入候、只々成功早く歸洛めされ度、出会祈り候」

「驚尾事も無故相済候事実ニ安心々々々々」

この手紙は、大津から1月23日付で出されたものであるから、早ければ当日に、遅くとも翌24日には、岩倉具視が読んでいた、とみてよいだろうし、したがって、岩倉の返事も遅くとも、24日には書いたものと判断してよいだろう。

最も興味がひかれるのは、年貢半減にかかわる所である（＊印）。香川は岩倉具視に、昨日も年貢半減について伺いをたてたが、いまだに何の沙汰もなく、はなはだ苦心している、と述べている。これに対する岩倉の答えは明快である。「財穀を散ずるの筋にて、半減と申す事は、不可」と、財政上の理由から、年貢半減は出来ないとはっきり言明していたのである。

政府が財政的に、危機状況にあったことは述べるまでもない実事であった。当時の朝廷の財政的基盤が、きわめて貧弱であった以上、新政府の財源は、旧幕府の領地や、朝敵の所領からあがる年貢に頼らざるを得ない。したがって、今後予測される征討軍派遣のための軍事費を考え、財政上の見地に立った場合、年貢半減ということは、現実にはきわめて難しい事であったし、ましてや前年未納分や来年の分まで半減などということは、ほとんど実施不可能な事なのであった。

にもかかわらず、一度は年貢半減を布告したのは、岩倉具視も述べるように「民心をとる」ために、やむなく行ったものなのであった。まさに「口実のみ」では、民衆の支持を得ることは「不可」である事がはっきりしていたからである。あるいは、推測にすぎないが、年貢半減の布告は、とりあえず中国、四国地方のみで、近畿以东は状況をみてから、と思っていたとも考えられなくはない。なぜなら相楽総三と赤報隊への御沙汰書(5)は、第一に東海道鎮撫総督の指揮に従うことを命じたものであり、したがって但書の年貢半減については、東海道鎮撫総督の指揮下において、タイミングを選んで発令されるべき筋のものと解釈されるべきで、赤報隊が今すぐ年貢半減を布告してもよいとは述べているものではないからである。

結果論的ではあるが、東海道鎮撫総督からは年貢半減令は出されなかった。一方で赤報隊は政府の意志を先取りしたかたちで、年貢半減を掲げて進軍していった。かくして年貢半減令は、いやおうなしに現実の全国的な問題となってしまったのである。ここに14日に布告した年貢半減令をどのように取り扱うか、政府部内の緊急かつ重要な問題となってきたのであった。

年貢半減問題が、22日まで政府部内における、重要な問題だったことは、香川も岩倉具視も同じように「甚苦心」「よほど苦心」していることで察しがつく。出先の東海・東山両道鎮撫総督においても、赤報隊の年貢半減布告にどのように対処すべきか、同じように苦慮していたことであろう。しかし遅くとも、24日の段階で、岩倉具視は「不可」という決着をつけていたのである。ただしこれが政府部内の一致した結論かと言うと、考慮すべき余地がある。というのは、(13)の「内国諸事務達留」が27日に書かれたものとすれば、23日から27日まで日時があき過ぎているように思えるからである。この間、政府部内での意思統一の時間が必要とされていたのかもしれないし、あるいはそれは、年貢半減令取り消しを、布告で正規に公表するか、それとも各地、各機関からの伺いに対して、回答するという形式にするかという、やはりもう一つの重要な問題を巡って、時間が必要だったという事情があったのかもしれない。その間の事情が伺える史料を、一つ紹介しておこう。

(15)年貢半減も大分夫々御施行候哉ニ申来候得共、今日ニ而ハ又、朝儀御止メニ相成候哉之儀、
実以不容易儀ニ付、如何仕候哉ト苦心仕候、何分ニも一旦以朝命半減ト御沙汰有之候以上、
猶又御止メトハ甚申難ク、夫々申渡候、処々ハ如何之所置ニ仕候哉、是又何度候

正月二六日

具定

この手紙は24日に大津を出発、25日守山、そして26日から28日まで在陣した愛知川において、東山道鎮撫総督の岩倉具定が、26日の午前に父の具視にあてて書いたものである⁴⁴⁾（部分のみ引用）。内容は、香川敬三の手紙に書いた、岩倉具視の年貢半減不可の旨の手紙(14)に接し、さらに指示を仰いだもので、いちど「朝命」をもって年貢半減の「御沙汰」を出した以上は、こ

んどは中止ということは、はなはだ言いにくい、他の所では、どのように処理しているか、伺いたい、と言うものである。

じつはこの手紙の後、同じ26日の昼に書いた、岩倉具定と八千麿（具経、副総督）連名の手紙があり、そこでは「年貢半減之儀、御施行難被遊趣キ承知仕候、貧民共へ能金穀ヲ散シ王化ニ服シ候様可致旨奉畏候」⁴⁵⁾とのべているように、26日の午前中に、年貢半減令を撤回するべき旨の、なんらかの正式な指令があったことが推測される。しかし残念ながら、政府あるいは岩倉具視から、どのような文面の指令があったのか、史料は残されていないので、これまた推測で述べざるを得ないのであるが、年貢半減は中止する旨の、指示と命令は伝達されたが、年貢半減令撤回の正規な布告は、ついに出される事はなかったと見てよいのではないだろうか。しかしともあれ、年貢半減令をめぐる、政府も出先機関も、「苦心」に苦心を重ねていた、というのが当時のいつわらざる状況であった。

〈二〉 さて赤報隊との関係であるが、まず気になることは、赤報隊の年貢半減の高札文(10)、(11)と政府の年貢半減の布告(12)、および赤報隊にたいする年貢半減についての御沙汰書(5)と、内容が異なる点である。その違いを要約してみよう。

(10)天領の当年の年貢半減（村々への布告）。

(11)天領の当年の年貢半減と諸藩の困窮の村方救助（本陣高札）。

（但、昨卯年未納之分モ、同様半減被仰付候事）

(12)天領および賊徒の所領の当年と昨年未納分の年貢半減。来年以後は取調べの上沙汰

(5)天領の当年と昨年未納分の年貢半減。来年以後は取調べの上沙汰

はじめに(11)について説明しておこう。(11)は赤報隊が高宮宿の本陣に掲げた、最初の年貢半減の高札であるが、『赤報記』にはカッコ内の、昨年度未納分の年貢も半減する旨の文言があったとは書かれていない。ところが『復古記』（東山道戦記）によれば、22日の条に赤報隊が美濃地方に年貢半減を布告したと記し、(11)と同じ文言の布告を載せ、但書きの体裁で、カッコ内に引用した文章を付け加えている。すなわち美濃路にはいってから、昨年未納の分の年貢も半減すると、布告したかのような、書き方である⁴⁶⁾。

これをどの様に理解すべきかということであるが、私は以下のように考えている。赤報隊は基本的には(5)の政府の沙汰書に基づいて年貢半減を布告しているのであるから、高宮宿の高札で、昨卯年の未納分の半減まで触れようとするなら、但書ではなく、本文のなかで言及するのが自然であろう。『赤報記』が記すこの時の高札に、未納分についての記載がなかったのは、その事に触れていなかったからであると思う。なぜこの時未納分については無視したのか、その理由は分らない。しかしそのうち、なんらかの事情、理由により、昨年未納分の年貢半減を布告することにし、そこで前からの布告に但書きの形で付け加えた、ということではなかった

であろうか。

まず気が付く事は今述べたように、赤報隊の最初の布告では昨年未納分については、何もふれなかったということであり、また来年以後の事については一貫して触れないことである。つぎに重要な事は、政府サイドのものは、天領(5)、天領および賊徒の所領(12)、と対象地域が限定されるけれども、赤報隊(11)布告では、「諸藩」の困窮の村救助と、年貢半減とは言っていないが、対象地域が諸藩一般にまで拡大されるということである。諸侯の領有制が廃止される前であるこの時点で、諸藩の困窮の村方救助を唱えるのは、内政干渉ともいふべきものであろう。

相楽総三と赤報隊は、たしかに政府から年貢半減にかんする指示を得ていたし、西郷隆盛や岩倉具視の年貢半減令の意向も承知していた⁴⁷⁾。しかし相楽と赤報隊の行為は、東海道鎮撫総督の指揮下においてなされるべき年貢半減の布告を、彼等の独自の判断で行ってしまったこと、また政府の年貢半減令（年貢半減政策構想）と異なるものを布告した等の点において、かならずしも政府サイドの意向を正確に反映したものではなかった。

相楽総三と赤報隊は、15日から年貢半減令を掲げて進軍していった。このことは近畿以東への、年貢半減実施の新たな展開であった。岩倉具視も西郷隆盛も、まだなりゆきを見守っている。18日に、正月5日から大津に在陣していた、橋本東海道鎮撫総督が動きだし、19日水口、20日土山、21日亀山、22日四日市へと進軍した。また岩倉具定東山道鎮撫総督軍は、21日に東海道鎮撫総督軍が移動して空いた大津に宿陣することになり、さらにこの東山道軍は、22日守山、25日愛知川へと進むのである。相楽総三と赤報隊の年貢半減令のうわさは、宿場から宿場へと情報ネットワークに乗って広がっていったことだろう。赤報隊は年貢半減令を残して先に進んで行くが、東海道、東山道両道の鎮撫総督たちは、その年貢半減令への対応を、いやおうなく迫られていたのである。ここに年貢半減令は、赤報隊だけのものではなく、むしろ政府が直面せざるをえない重要問題となったのであった。

結果として、主として政府財政上の問題から、岩倉具視＝政府サイドは、多分23日には、年貢半減の中止を決意する。中止する旨の正規の指令は、26日に愛知川の岩倉東山道鎮撫総督の元に届いた。京都からの距離と時間を考慮にいれると、この中止指令は、25日に政府から正規に出されたことになる。同じく、四日市に宿陣している橋本東海道鎮撫総督のもとにも届いたことであろう。同じ25日に、鶴沼に滞陣している赤報隊に帰還命令が、政府から届いた。そして滋野井隊の一部が、四日市で処刑されたのが26日であった。

VI 「偽官軍」への道

香川敬三から岩倉具視への手紙(14)で、いまひとつ注目すべき所は、以下の部分である。

…綾小路卿、滋野井卿之御義も深御痛心被為在候由奉恐察候、是は愚考スルニ、アナカチ

農商之申通りニも有之間敷、夫ニは不得止情実も可有之御事と遠察仕候、此義は私共等より、彼の御陣へ參上仕、朝廷之御痛配之趣キ等申上候ハ、速に東海道迄御出馬之運ヒニ可立至ト奉存候……

香川のこの手紙の部分にたいして、岩倉は以下のように「弟ニも同列、殊ニ綾小路ニハ間柄傍深情ヲ尽くし、風聞之儘可申入頼候、実ニ残心之事也」と述べる。両者の往復書簡から、つぎのような情景が、浮び上がってくる。

岩倉具視は綾小路俊実とは特別の間柄であった事。綾小路、滋野井にかんしては、(よくない)風聞が伝わってきており「痛心」しているが、そのまま香川に伝えた事。悪い風聞の出所は「農商」にあること。香川は綾小路に会いに行き、岩倉具視の心配を伝えようとしていること。そうしたならば、東山道を進んでいる綾小路等は、東海道に戻ってくるであろうこと、等々である。

「農商」からの悪い「風聞」は、おそらく金銭にかかわるものであろう。26日付の東山道鎮撫総督岩倉具定の手紙には「清岡士ハ決而綾小路卿之於兵士ハ、侵民之米金候様之事ハ必有之間敷ト段々申候得共、現在大垣よりも申来り諸所より申来り候事ニ付、全ク無之事トモ不存候⁴⁸⁾と、民衆からの苦情が諸所から寄せられていることが述べられていた。このように滋野井隊だけではなく、綾小路赤報隊にたいしても、かんばしくない評判が、あちこちから上がっていたのであった。

滋野井隊はもとより、綾小路の赤報隊にたいしても、進軍コースにあった村々は、相当の金額にあたる兵糧を負担していたから、これにたいする苦情があつて当然である。赤報隊の人数は、史料などにも、およその数しか書かれていなくて、正確にはつかみえない。綾小路の赤報隊、滋野井隊ともに、150人前後といったところではなかったろうか。その日その日で、来る者もあり、去る者もあっただろう。宿泊や食事の代金を、そんな彼等がきちんと支払ったとは思われない。柏原宿では赤報隊の宿泊・荷物継立人馬賃を受けとらなかったが、それは公卿を擁した朝廷の軍というふれこみであつたし、年貢半減を布告して進軍する新政府の軍という装いだったから、金銭を要求しにくい雰囲気があつたことによるのではなかろうか。

幕末の宿場と周辺の助郷の村々が、窮乏化していたことは、すでに周知の事柄に属する。そうした宿場と助郷の村々にとって、たとえ赤報隊が、世直しの切り札ともいふべき年貢半減令を掲げていたとしても、それはこの年の末に約束される先の事なのであつて、それよりも目の大きな負担に耐えかねる面もたしかにあつたのである。農商のホンネの小さなつぶやきが、次第に寄り集まって、勢いのある波となり、京都の岩倉のもとに次々と届いたのではなかったろうか。

また高松実村等の挙兵は弘誓寺でおこなわれ、その際この寺の檀信徒(主として五個荘商人=近江商人。現神崎郡五個荘町)が数百両を献金したといわれているが⁴⁹⁾、これなども後から、あ

まりかんばしくない噂となって、伝わった事も考えられる。けっしてすべての人々が、喜んで献金したものではなかったであろうし、高松隊の事とは言え、公家の挙兵であったから、赤報隊と混同されて、京都に伝わることは、十分に考えられる。

岩倉具視＝朝廷政府サイドの「痛心」は、金銭に関わることだけではなかった。いま引用した同じ手紙の中で、総督岩倉具定は「綾小路卿義段々子細も有之候ニ付、是非東海道ヲ被進候得は都合も宜被遊、戦功も候哉ニ伝承仕候得共、何分ニも私共東山道鎮撫之任ヲ蒙リ乍ラ、右卿之如キ有之候得は、処置之処も色々ニ相成、甚困入候」（26日付）と、赤報隊の処置に困っているむねを、政府に訴えていた。「処置之処も色々」で困るとは、どのような事だったのか。確証はないが推測できないことはない。

21日に綾小路赤報隊が宿陣した美濃加納宿は、幕府の会計奉行永井尚服の領地であるが、当時藩主の尚服は江戸在府で不在であった。赤報隊は重臣を呼びつけ、相楽総三が応対し、開城を命じた。加納藩重臣は、江戸に使いして尚服を辞職させ、以後勤王のため力を尽くすことを誓い、家名断絶なきよう嘆願し、大砲2門、銃70挺と弾薬ほかを、赤報隊に献納した。また近江宮川藩（藩主堀田正養、帝鑑問、定府）は滋野井隊の山本太宰らに、武器か粮米か金子かいずれかを献納せよと迫られ、21日に630両を差し出している⁵⁰⁾。

加納藩、宮川藩ともに一種の開城処分（宮川藩1万5千石は陣屋）を受けたものといえよう。しかし開城には一定の手続きと作法があり、総督の指揮下に行われるべきもので、赤報隊や滋野井隊が勝手に行うべきものではなかった。さらに開城後の藩主や家臣の処遇、武器金銭の取扱い等々、一定の方針のもとで行われるべきで、藩により、処分を実際に担当した者により、それぞれ区々であって、鎮撫政策全体にもかかわってくる大問題であるはずであった。処置が色々で困るとは、以上のような事情を物語っているように見える。あるいは早速、赤報隊が布告した、昨年の未納分の年貢半減をめぐって、後から進む総督が、村々に何等かの対応をすることを迫られていたのかもしれない。

以上見てきたように、赤報隊が進軍したあとに残っていた問題をめぐって、政府はそれへの対応に苦心を重ねていた。このまま赤報隊の進軍を黙認し続けては、さらに大きな波紋を生じさせることになるだろう。政府は決断せざるを得なかったのである。

25日、鶴沼に在陣していた綾小路俊実と赤報隊のもとに、政府から帰洛命令が届いた。「今度、東征大軍議被為在候ニ付、一先上京可致被仰出候事」⁵¹⁾という簡略な参与からの達である。25日に朝廷から出されたこの沙汰書は、即日、鶴沼の赤報隊に届けられたのであった。この達には付属した政府からの指示があったようで、赤報隊三番隊長油川信近が「鶴沼駅まで進みました所が、太政官より御達が到来しまして、大軍議在らせらるるに依って其の赤報隊引纏め早々上京すべしという事でありました、そこで参謀軍裁等を綾小路卿の御前に会して会議を開かれまして、さて大命黙止難いに依て今より一同引纏めて帰京する旨を申されると、相楽総三

が不承知でありまして」⁵²⁾と述べるように、実質的には赤報隊の解散命令であった。

相楽総三のグループを除いて、綾小路俊実と赤報隊の二・三番隊は、この帰洛命令に従った。綾小路と赤報隊は、27日に名古屋につき、29日に四日市の東海道鎮撫総督のもとに出頭した。先に述べたように、この時既に滋野井隊は処分・解散となっており、ここについて赤報隊は完全に解体となったのであった。

26日以降、相楽総三とそのグループは、自らを官軍先鋒嚮導隊と唱え、独自の行動を取り、相楽総三が一貫して主張してきたごとく、東山道を進軍していった。彼らは政府の命令にも東海道鎮撫総督の指示にも従おうとしなかった。そして2月10日、相楽総三らを「偽官軍」とする、東山道先鋒総督の布告文（回章）が出されることになったのである。相楽総三と嚮導隊については、高木俊輔の著書に詳しく述べられているので、この稿では省略したい。

お わ り に

以上赤報隊の結成から、わずか2週間で解体に至った、その過程をみてきたが、最後になぜ解隊させられたのか、という点を中心に、いくつかの問題点と、言い残した事をまとめて、この稿を終わることにしたい。

- 1, 赤報隊は、政府からの東海道鎮撫総督の指示に従うべしという命令を無視して、東山道を進軍していった。この点が、最も基本的な誤りで、解体させられた最大の原因である。
- 2, 赤報隊の布告した年貢半減令は、彼等の独自な判断による面があった。基本的にはこれも東海道鎮撫総督の指示を仰いだ上でなされるべきで、半減令の内容も、政府案と異なり、布告の時期も、適切であったかどうか、疑問とするところが少なくない。
- 3, 特に滋野井隊の場合であるが、長島藩に対する金銭の強要や、農商民に迷惑のかかる行為など、逸脱した行動がめだち、またその風体なども〈官軍〉としての品位と規律に欠ける場所があった。

以上は、赤報隊それ自身が持っていた問題点である。しかしこれらの理由だけで、赤報隊が解体させられたわけではない。朝廷＝政府の側にも、赤報隊を解体させるべき大きな理由があった。以下それらの点について述べておこう。

朝廷＝政府が徳川慶喜以下、松平容保や板倉勝静ら慶喜側近の幕府閣僚の官位をうばい、いわゆる朝敵として「追討」する旨を布告したのは、10日のことである。つまり「賊徒」追討が朝廷＝政府の政策課題となるのはこの日以降で、それまでは諸道（山陰、東海、東山、北陸）の鎮撫が先であった。鎮撫から追討への方針転換である。しかしだからといって、政府がすぐ軍隊の派遣そして進軍が可能であったかという点、周知のようにそれは出来なかった。その理由は、先ず第一に軍事力が弱体だったからである。この段階で、朝廷＝政府の軍隊は、鳥羽・

伏見戦争を戦った、薩摩、長州、土佐三藩兵が中心で、徐々に諸藩の兵が加わってきてはいるものの、まだ諸藩の軍勢力を十分には動員できていなかった。また朝敵藩の動向はともかく、曖昧・中立的諸藩の態度も気になり、先ず京・大阪の守りを固める事が先決問題だったのである。具体的にいえば、征討大將軍嘉彰親王が大阪に本営を構えて、海と山陽道に睨みをきかせ、山陰道には山陰道鎮撫総督の西園寺公望を派し、東海道・東山道の合流地である草津を望む近江の大津には、東海道鎮撫総督橋本実梁を滞陣させるという体制であった。

しかし朝敵追討令（10日）が出てから、急激に状況が変わる。まず中立・曖昧諸藩が朝廷政府を支持する方向に転じ、そうした諸藩の動きに影響されて、薩長兩藩とは比較的距離をとっていた藩も、朝廷＝政府支持の態度をはっきりさせたのである。という事は、これらの藩からの兵士の動員が可能となったことを意味する。また四条隆謨が中国四国追討総督に任命されたのが13日であったが、ほとんど軍事行動に移る間もなく、中国四国諸藩は、朝廷に勤王誓紙を差し出し恭順して行き、こうして近畿以西の諸藩にたいする政府の心配はなくなっていったのである。15日、政府は諸外国に王政復古を通告したが、これは以上のような状況が背景としてあったと考えてよい。

政府の目は東国に向けられて行く。諸藩兵の動員によって、政府軍の体制も整備され増強されていった。東海道鎮撫総督が大津を発ったのが18日であるが、これも以上のような状況の変化が背景にあったのである。軍勢力と諸藩の動向に自信のなかった政府は、鳥羽・伏見戦争から、その後10日過ぎ頃までは、あらゆる手段、あらゆる勢力を求めそして利用しようとした。赤報隊はまさにそうした時に結成されたのであった。政府は赤報隊を認め、東国の事情に詳しい相楽総三ら草莽の力に、一時は頼ろうとしたのである。

しかし状況は変わった。諸藩兵による政府軍の整備と増強が可能となると、草莽隊に対する態度が、大きく転換していった。たとえば西園寺山陰道鎮撫総督の発向（5日）にあたり、政府は一時は丹波山国庄の郷民（山国郷士）に武器を執り随従を命じながら、15日になると、総督「護衛の兵士目下多人数故不用」⁵³⁾という理由で、帰村させたのであった。このような草莽にたいする政府の態度の変化は、高松隊結成のときにも見られ、16日に政府の評議が変わり、草莽の単独挙兵は正式には認めない、ということになった。草莽にたいする政府の評価が、大きく低落したのである。いまはこれ以上の史料を示す事ができないが、14～16日あたりが、その転換点ではなかったろうか。

4、赤報隊が生き延びる道は一つあった。それは山国隊や多田隊がそうであったように、そして政府からの指令にもあったように、正規軍（赤報隊の場合は、東海道鎮撫総督軍）の配下に編入されることである⁵⁴⁾。しかし赤報隊は、あくまで独自の道を歩もうとしたのであった。しかも草莽隊に対する政府の評価が大きく低落している中で……。

5、政府が「会計基金金三百万両募債」を決定したのは23日の事である。三井、小野、島田、

鴻池らの特権大商人が、これに協力することになった。かれらは交換条件として、年貢米の独占的取扱いを政府に要求した。そして取扱い高の減少をまねく、年貢半減令に反対した、と推測される⁵⁵⁾。岩倉具視が年貢半減は「不可」と決断した背景には、これらの特権商人の強い圧力が働いていたのではなかったかと思われる。こうした政府の政策転換にもかかわらず、赤報隊は年貢半減の布告を出し続けたのであった。

こうして赤報隊は解隊させられたのであった。27日、東山道鎮撫総督から次のような布告が出された。「近日滋野井殿、綾小路殿家来忤ト唱へ、市在へ徘徊致シ、米金押借り、人馬賃錢不払者モ不少趣、全ク無頼賊徒之所業ニテ」と、赤報隊の名をかたり、悪事をする者がいるが、そうした者がいたなら、本陣に訴え出、もし手向かうようであったら「討取候共不苦」と述べるものであった⁵⁶⁾。これは単に赤報隊からこぼれた隊士の事をさしているのではなく、政府の統制から逸脱して行動する、総ての草莽にたいする弾圧と規制であったと解釈出来よう。

岩倉具視の側近である大橋慎三は、2月6日岩倉への手紙で次のように述べている。「草莽之士は是迄は聊御回復之御一助なきにあらず、且積年賊網中を徘徊仕り、勤王之志遂に屈せず今日に至り候故、必しも今列藩兵勢盛也とて、草莽の者を塵芥之如く御捨てに相成り候而は、御義理に於而朝廷之不被為済候訳も可有之」⁵⁷⁾と。相楽総三たちが信州下諏訪で処刑されたのは3月3日のことである。それより前に岩倉具視の周辺の者が、草莽を「塵芥」の如く捨ててよいのかと、いささかの抗議をこめて訴えていたのであった。政府そして岩倉具視の周辺には、そのような空気が強かった事を物語っていると言えよう。

相楽総三も塵芥の如く捨てられた。だがなぜ相楽総三は、政府からの指令を無視し続けたのだろうか。赤報隊への帰還命令の後、京都に連れ帰るべく、彼の周辺の動きがあったにも拘らず……。今にいたるいくつかの謎を残して、手綱をふりきった奔馬は、ついに後ろをふりかえることがなかったのであった。

京都に連れ戻された綾小路俊実と滋野井公寿は、何の咎めも受けなかった。綾小路は実家の大原家に戻り、大原重実となり、2月晦日、海軍先鋒を命じられ、閏4月19日に海軍先鋒総督となる。そして滋野井も、4月27日に佐渡裁判所総督となった。また油川信近、鈴木三樹三郎らの隊長はじめ、隊士の多くも、しばらく集団戦闘の軍事訓練を受けたあと、4月頃から政府軍に編入されていった⁵⁸⁾。

- 1) 『赤報記』（『相楽総三関係史料集』青史社、1975）赤報隊に関する記述で、とくに断らないかぎりは、この『赤報記』を典拠とする。
- 2) 岩倉具視関係文書〈岩倉公旧蹟保存会対岳文庫所蔵〉綾小路俊実書簡R2、七一16-(7)（北泉社マイクロフィルム）。以下、引用するマイクロフィルムの岩倉具視関係文書はすべて、岩倉公旧蹟保存会対岳文庫所蔵のものである。
- 3) 『復古記』第1冊、516p。

- 4) 赤報隊参加者に関しては、高木俊輔著書(AXB)に詳しい。
- 5) (1)は注3)と同じ。『復古記』第1冊, 516 p。(2)は、『復古記』第1冊, 522 p。
- 6) 高木(A)129 p。
- 7) (3)(4)ともに『赤報記』16, 17 p。および『復古記』第1冊539,540 p。
- 8) (5)は『赤報記』17 p および『復古記』第1冊539 p にあるが、文言が少しだけ違う。『赤報記』はこれを「右両度建白（相楽総三の＝引用者注）依之於太政官坊城大納言殿ヨリ御渡之勅諭書」であるとしている。しかし当時坊城大納言なる人物は存在しない。この事や、「勅諭書」としての文書形式の問題、あるいは当時の政府権力・政府組織がまだ不安定であったという理由から、『赤報記』の史料的価値を疑問視し、この史料(5)もまた疑問視する芳賀登の意見がある（『偽官軍と明治維新政権』教育出版センター, 1992, 132 p 他）。たしかに「勅諭書」と言えるかどうか、という点に関しては確証がない。しかし「被仰出」、「御沙汰」という書き方は、天皇の意志を伝達する当時の文書表現様式であり、この(5)文書が、天皇の意をうけた形で政府が発行した公文書の性格を持つものと見るべきである。これらについては原口清「年貢半減令は朝廷がだしたのではなかったのか?」（教科書裁判, 第3次訴訟控訴審の証言意見書）が参考となる。
- 9) 『史談会速記録』78号。
- 10) 『史談会速記録』81, 315号。
- 11) 羽倉敬尚「幽居中の岩倉具視」（『国学院雑誌』1964, 12）。同「岩倉股肱の京人松尾但馬とその周辺」上下（『日本歴史』244,245号, 1965）。
- 12) 大久保利謙『岩倉具視』中公新書, 132～37 p。
- 13) 城多董「昨夢記」（岩倉公旧蹟保存会対岳文庫, 北泉社マイクロ収録予定）。
なお城多董については佐々木克「草莽の志士城多董と岩倉具視」（『日本歴史』500号, 1990）がある。
- 14) 岩倉具視関係文書R1, 七—2-(2)（北泉社マイクロフィルム）。
- 15) 岩倉具視関係文書R11, 十七—3-(108)（北泉社マイクロフィルム）。
- 16) 同上。
なお挙兵に至る経緯については、『史談会速記録』75（吉中直の談話）, 78（秦林親の談話）なども参照。
- 17) 岩倉具視関係文書R22, 四—33（北泉社マイクロフィルム）。
- 18) 『史談会速記録』81,315号の山科元行の談話。
- 19) 『史談会速記録』81号。なお315号の、同じ山科元行の談話では、綾小路俊実が神経症であったように述べているが、これは速記録の誤りと思う。
- 20) 岩倉具視関係文書, 注2と同じ（北泉社マイクロフィルム）。
- 21) 『史談会速記録』15号。
- 22) 『嵯峨実愛日記』（史籍協会本）二, 217 p。
- 23) 『復古記』第1冊, 595 p。この告諭は『鹿児島県史料 忠義公資料 第4巻』（1977）873～874 p にも収録されており、それによれば告諭は、参与から尾張、越前、土佐、安芸、薩摩等の諸侯にも伝達されている。
なお12日の段階で「猥ニ公寿、俊実等之挙動ニ倣ヒ、勢ヲ見テ進退」することのないようにとの「総裁宮御沙汰」が出されている（『復古記』第1冊, 523 p）。
- 24) 長谷川伸『相楽総三とその同志』中公文庫, 下45 p。
- 25) 『赤報記』20,21 p。
- 26) 高木俊輔(c)は滋野井隊が大垣から桑名、四日市というコースをとったことを本文に書いているが（37 p）, 同書30 pの「赤報隊進軍図」は、東海道を進んだように作られており紛らわしい。

- 27) 『改訂肥後藩国事史料』 8 卷, 47 p, 国書刊行会, 1974。
- 28) 『史談会速記録』 59号, 渡辺清の談話。
- 29) 『橋本実梁陣中日記』(史籍協会本) 122 p。
- 30) 従来の研究では、綾小路俊実らの赤報隊と別行動をとった、滋野井隊の行動があまり明らかにされておらず、「悪い噂」に関しても、何が原因なのか、かならずしも明快に説明されてこなかった。滋野井隊について最初に言及したのが高木(C)著である。
- 31) 史談会編『戦亡殉難志士人名録』復刻, 原書房, 1976。
- 32) 「大原重実事蹟」東大史料編集所。
- 33) 『復古記』第 9 冊, 147 p。
- 34) 高木(C)著 36 p。なおこの墓は後に移されたものと思われ, 付近をさがしたが, 綿引, 小室の墓以外に, この時処刑された者の墓を見つけることは出来なかった。
- 35) 注27) と同じ。
- 36) 岩倉具視関係文書, 注15) と同じ(北泉社マイクロフィルム)。
- 37) 注33) と同じ。
- 38) 『山東町史』(滋賀県坂田郡) 922 p。
- 39) 『赤報記』 18 p。
- 40) 『岡山県史』 28巻, 58 P。なお同じものが『復古記』第 1 冊, 557 p に掲載されている。
 * なお, 高野山に挙兵した, 鷲尾隆聚も年貢半減を布告しているので, 以下に紹介しておこう。
 鷲尾殿御支配地当戊辰御年貢半減被仰付候, 孰も可致精勤之事
 慶応四戊辰正月 鷲尾殿執事
 以上のようなものであるが, この文言の前に触書があり, それによると「是迄徳川家元支配地之もの共一切鷲尾殿御支配被相心得為大朝精々御奉公可申上候」と、(大和国吉野郡の)天領を鷲尾の支配地とするとあり, つまり, 鷲尾の支配地とした旧幕領の年貢を半減するという布告である。出された日時は不明であるが, 鳥羽伏見の戦争で敗れた徳川慶喜が東帰した正月 6 日から, 「農商布告」(天領を朝廷の直轄地とするという)が出される10日までの間に出されたものであると考えられる。この布告が朝廷=政府の指示によるものかどうか, 論証する史料がないので, 後考を期したい。出典は『川上村史』史料編上巻(1987) 189~190 p。
- 41) 芳賀登は『偽官軍と明治維新政権』のなかで「(将軍の宮=仁和寺宮は)太政官代におけるその占める地位からいっても, それほど権力のある人とはいいがたい。それが朝廷を代表するかどうかについてもいささか問題があるのではないか」(52 p)と述べているのであるが, なにかの誤解ではなからうか。当時の政府職制によれば, 総裁は「万機ヲ総裁シ一切ノ事務ヲ決ス」とあり, 職制上の最高権力者であるが, 仁和寺宮の議定は, この総裁につぐランクの職で「事務各課ヲ分督シ議事ヲ決定ス」(『法規分類大全』)とあり, つまりこの「年貢半減令」を例にとれば, 半減令を出す事を決め, その半減令を監督する立場にある人物なのであった。
- 42) 宮地正人「『復古記』原史料の基礎的研究」(東京大学史料編集所『研究紀要』 1, 1990)。
- 43) 岩倉具視関係文書 R 1, 七-7-(7)(北泉社マイクロフィルム)。
 なおこの書簡の重要性に注目した, 目良誠二郎論文「年貢半減令に関する岩倉父子の書簡をめぐって」(海城中学・高等学校『研究集録』 14集, 1990)があり, 書簡の全文が初めて紹介された。
- 44) 「東山道督府書類」 4, (国会図書館憲政資料室『岩倉具視文書』 140)。なお注42)の目良論文に全文が紹介されている。
- 45) 同上。なおこの書簡も目良論文で紹介されている。
- 46) 『復古記』第11冊, 111, 112 p。

- 47) 西郷隆盛の年貢半減意見は、『西郷隆盛全集』第2巻（大和書房，昭和52）所収の，蓑田伝兵衛宛明治1年1月16日付書簡参照。
岩倉具視については，香川敬三宛ての返事¹⁴で，当初は年貢半減に反対する立場ではなかった事がわかる。
- 48) 注44)と同じ。
- 49) 注21)と同じ。
- 50) 『復古記』第11冊，106～110 p。なお2月22日に永井尚服を，同28日に堀田正養を，東山道鎮撫総督が正式に処分している。
- 51) 『復古記』第9冊，150 p。なお，この達が25日に出されたものであることは，以下の史料によって明らかである。国文学研究資料館史料館所蔵「岡谷繁実文書」（『史料館研究紀要』24号，1994年，所収，「岡谷文書—幕末・明治書翰類—1」）。
- 52) 注9)と同じ。
- 53) 『贈従一位池田慶徳公御伝記』二，370 p，鳥取県立博物館，1988。
- 54) 多田隊と山国隊については，以下の文献を参照。宮川秀一『戊辰戦争と多田郷土』（川西市，昭和59）。藤野斎『征東日誌 丹波山国濃兵隊日誌』（国書刊行会，昭和55年）。
- 55) 高木^c38,39 p。
- 56) 『復古記』第11冊，120 p。
- 57) 『岩倉具視関係文書』（史籍協会本）第3，419 p。
- 58) 注9)と同じ。